京都の民主運動史を語る会
会　報

2013年7月15日
第207号

題字　住谷悦治

燎原

燎　原　社
（京都の民主運動史を語る会）
代表　岩井忠熊
事　務　局
京都市左京区高野東開町1-23
第三住宅33-302　井手幸喜
〒606-8107
tel & fax075（722）3823

京都の民主運動史
史跡散歩①

【新連載】

京都大学学生集会所（左京区吉田）
「京都学連事件」の舞台

京都大学吉田南構内、東大路に面して立つこの建物は1911（明治44）年に、旧第三高等学校学生控所として建築された。100年を超えてなお現役だったが、ついに今夏から取り壊しが始まる。

この木造2階建ての建物で、1925（大正14）年7月、学生社会科学研究会第2回大会が開かれた。この参加者たちが、治安維持法の最初の適用を受けて検挙された。「京都学連事件」とよばれるこの事件、37名が起訴され、野呂栄太郎や岩田義道をふくむ全員が禁固1年～8月の判決を受けた。

戦後の京都の運動に足跡を残した栗原佑、泉隆、太田遼一郎らも被告だった。

1943年の「学徒出陣」にさいしてこの集会所で文学部教授会のメンバーによる壮行会をもってもらった岩井忠熊氏は「あの建物は歴史的文化財として保護できないだろうかとの思いをいだかずにはおれない」（「燎原」166号）と述べている。

6月16日には京大合唱団同窓会による「お別れの会」が部室で開かれた。

映画「日本の憲法」制作と府庁に憲法垂れ幕が懸かった頃　13年度総会　井ヶ田良治氏の記念講演　2
私の一期一会⑤　元全日自労京都支部委員長　外尾英範さんに聞く　佐藤　和夫　4
その時、私は…　全自交100日ストの思い出　片寄邦夫さんと仲間が語る　小田切明徳　8
研究ノート②　京大看護学校事件と天皇巡幸　今西　一　9
(悼) 永原誠氏（立命館大学名誉教授）の思い出　岩井　忠熊　10
BOOK「新日本婦人の会京都　50年のあゆみ」　編集委員会に参加させていただいて　澤田　季江　11
連載「京都民報」私史(5)　紙面・性格をめぐっての論争　湯浅　俊彦　12
2013年度総会ひらく　聞き取り、掘り起こしを「燎原」に　14
会員消息　14
9月例会案内　16
情報スクラップ／催し案内／編集後記　16

【京都の民主運動史を語る会】年会費（会報代とも）3,000円　郵便振込口座　01060-7-15762　加入者名　燎原社

映画「日本の憲法」制作と府庁に憲法垂れ幕が懸かった頃

13年度総会　井ヶ田良治氏の記念講演

6月15日午後、市職員会館かもがわで開かれた本会2013年総会では、1965年に制作された記録映画「日本の憲法」（京都憲法改悪阻止映画制作普及実行委員会）を観た後、当時のエピソードを交えながらのお話を井ヶ田良治・同志社大学名誉教授から伺った。以下その要旨（総会報告は14面に）。

同志社大全学教授会が破防法反対声明

東西冷戦時代に入り、団体等規正令をはじめとして、日本でも反共を前面に押し出した取り締まりが始まった。『世界』を中心に全面講和を主張する論陣も張られたりはしたが、ジャーナリズムもその状況を醸し出す上で大きな役割を果たしたといえるだろう。1952年の講和条約発効によって、団体等規正令が失効するために生ずる軍事的空白を埋めるべく、日米両政府は「破壊活動防止法」を成立させた。

片面講和に反対し、すべての国との講和を望む運動の継続、そして治安維持法の戦後版とも云える破防法への反対闘争が沸き起こった。京都の各大学では教授会の場で反対の意思表示をする提案がなされ決議されていったが、多くの教授会で少数の反対や慎重論があり、反対を決議した幾つかの大学・学部でも破防法反対の決議はしたが、このような事柄は教授会の審議事項ではないとか、全員一致ではないという理由で、教授懇談会とすることにした大学・学部が多かった。

私が、当時学生部長だった岡本清一先生（政治学）らに推薦頂いて、同志社大学に助手として採用されたのが51年。破防法反対の運動での同志社大学の対応は他の大学と異なっていた。大学「学則」に、全学教授会なる学長主催の機関が定められていて、戦後にも、学費値上げにあたって全学教授会が開催された先例があった。

そこで、学部教授会の審議状況をみながら、各学部から数名の呼びかけ人を選び、呼びかけ人の連名で全学教授会を開催するよう学長に要請。同志社大学では全学教授会の名前で反対声明が出されたのである。

同志社大学での反対運動を支えたのは、昭和初期の山本宣治の暗殺に象徴される治安維持法体制下の思想弾圧の苦い記憶であり、逮捕・投獄された人を助けることができないまでも、好意以上に尊敬・信頼をよせていたのが多くの国民の偽らぬ思いであったようである。

破防法反対学生デモ隊に教員が付き添って歩く

破防法に対する大学の反対声明運動は、京都のみならず近畿一円から更に全国の大学に広がった。近畿では、地域ごとに集まって地区連合を結成し連絡を取り合った。

教授懇談会は、教職員組合等と連絡をとり、学生のデモが警官隊と衝突しないようにする等の配慮もおこなった。円山公園までの同志社大学からのデモ隊は1000名前後、警官隊とデモ隊の間に教員が点々と付き添って歩き、円山公園での統一集会の日（6月17日）には、岡本清一学生部長の発案で、警官隊は学生・労組のデモ隊が荒れない限り強制解散命令は出さないという暗黙の了解さえ得ていた（武装警官隊は祇園石段下弥栄中学で待機）。

私は、岡本先生の助手の格好で動き、集会の進行は議長の岡本先生の判断。釘をさしたままでしているデモ隊プラカードは危険なので、可能な限り学校や職場ごとに集め、管理することとした。学生の指導部の主だった者を音楽堂舞台裏に集め、デモ隊から切り離され不服そうな諸君に警察との約束を説明。約束はあるものの警察としては集会を途中で解散させたいに違いなく、そうなると、集会参加者、特に女・子どもも危険になるので、解散命令が出る直前に解散したい。武装警官隊の接近状況を判断材料にして、議長団が集会継続か解散かの判断をする、その際の諸君は大衆を守る役割を担うことを説明し、音楽堂の舞台裏から三々五々祇園の町に彼らを送り出した。

しばらくして、ポツリポツリと報告が返り始め、警官隊が徐々に動き出し円山公園を取り囲む円が縮小してきた。囲まれてきつつある状況を

執筆者紹介

佐藤　和夫（さとう・かずお）　本会世話人、前京都市議。伏見区在住）

小田切明徳（おたぎり・あきのり）　本会世話人。伏見区在住。

今西　一（いまにし・はじめ）　小樽商科大学特任教授。伏見区在住。

岩井忠熊（いわい・ただくま）　本会代表。立命館大学名誉教授。大津市在住。

澤田季江（さわだ・としえ）　新日本婦人の会京都府本部事務局次長。

湯浅俊彦（ゆあさ・としひこ）　本会世話人。元「京都民報」編集長。大山崎町在住。

岡本先生に報告、これ以上無理ですと告げた。すぐさま岡本先生は流れ解散を宣言、集会を無事に終えることができた。

その後、集会参加者の無事を確認しようと、岡本先生と私が総長の車を借り、パトロールに出かけたが、外車ということもあってか、車のボディーにかなりの傷を負ってしまいお叱りを受けたこと等も思い出として残っている。

成立した破防法は第二・三条（解釈・運用）で「いやしくもこれを拡張して解釈するようなことがあってはならない」「日本国憲法の保障する国民の自由と権利を不当に制限するようなことがあってはならない」と明記しているが、これも反動立法反対運動の広がりの成果であろう。権利をまもる運動がいかに大切なことかを教えてくれる。

護憲活動を支えた人たち

教授懇談会は、同志社大学の明徳館の階段教室で解散大会を開いた。近畿全域の大学から集まった先生方は、懇談会の組織を残すか残さないか議論の末、事務局を残し相互に情報を交換し合う緩い連絡組織にすることとなった。

突然「議長」と発言希望の手が挙がった。田畑忍同志社大学学長である。立ち上がるなり、組織の名称の頭に「憲法擁護」と付けて欲しいと。

「京都地区 憲法擁護教授懇談会」の誕生

憲法改正などまだ話題になっていない時だっただけに、会場全体が静まりかえっていたら、民法の西村信雄先生（立命大）が大きな声で「賛成」と叫び、皆拍手で承認した。これが憲法擁護教授懇談会の発足となった。

講演会や市井の集会への講師派遣、学生運動での逮捕者の貰い下げ等、様々な活動をおこない、色んなエピソードも生み出されていった。事務局は宮内裕、天野和夫、山下健次、畑中和夫、松岡正美、中山研一などが常連で、全員が法学研究者だったが、他に立命館から岩井忠熊さんが加わり、同志社からは井ヶ田と社会福祉の小倉襄二さんが加わっていた。司令塔は宮内裕さん、後に天野さん。

講和条約は結ばれたが、日本に置かれた米軍の基地はなくならなかった。旧安保が、日本を支配するアメリカの事実上の軍事占領を継続させることになる。この時期の反動化は専ら立法のかたちをとっておこなわれたので、法学者の出番が多かった。55年に自由党と民主党が合同し、衆参両院とも改憲派議員が3分の2を超え、憲法の危機をむかえることとなった。同年8月、民主党は「憂うべき教科書の問題」なるアジア・太平洋戦争時代と変わらない偏向した立場からの教科書非難を繰り返した。組合（特に日教組）・アカ・共産党を敵視することを通じて、自由・平等の世界人類全体が希求している理念から子どもたち遠ざけ、戦前の侵略主義日本帝国の夢を再現することを願っていると思われた。この手法は、裁判官に対する国家統制を強めるために、青年法律家協会攻撃にも用いられた。

「デートもできない警職法」

学力テスト・勤務評定・修身復活・教育委員を公選から任命制へと復古調の教育制度への歩みを突き進んだ自民党政府は、56年になり、警察官職務執行法の改正案を国会に提出、所持している警棒を肩より挙げることが禁止されていたこと等の変更を求めた改正案だった。「デートもできない警職法」と、女性週刊誌までが批判的な論調を続け、結果、法案は審議未了に終わった。警職法反対で生まれた高揚は、皇太子成婚の「ミッチーブーム」で霧散させられたが、「60年安保」で再び燃え上がる。

京都憲法会議結成から半世紀

「三矢（みつや）研究」は、日米共同による、戦争と国家総動員の本格的な秘密作戦でその全貌は未だ明らかとなっていない。63年の日付のある僅かに漏れた情報によるだけでも、日米支配層は本格的な戦争をも予想していたことが分かる。

この状況下で、憲法改悪反対の一点で一致するすべての人を結集する運動体として組織されたのが、65年の憲法改悪阻止各界連絡会だった。京都では京都憲法改悪阻止会議、略称して京都憲法会議と呼ばれ、宮内裕さんや稲田達夫さんらが蜷川知事と、京教組とは市木修さんが連絡をとっていた。宗教者では藤谷俊雄さん・細井友晋さん・福岡精道さん、婦人では中井あいさん・寿岳章子さんなど、各層各分野につながりがあった。

憲法会議が結成されてから約50年、憲法は国民のなかに定着しつつある。憲法の素晴らしさをもっと肯定的、積極的に訴えても良いのではないかと思う。

質疑応答・懇談から

記念講演の後での懇談で、破防法での実際の取り締まりを許さなかった、そのことは実際上法律を阻止できたともいえるのではないかとの意見。憲法擁護教授懇談会前後の市内大学学長の対応や弁護士を中心とした大阪での運動との違いが紹介され、また教授懇談会で採用された憲法擁護のスローガンは先見性を持っていたのではないか等の論点も提示された。

（文責・井手幸喜）

私の一期一会 ⑤

元全日自労京都支部支援ボランティア 外尾英範さん（83）に聞く

聞き手 佐藤和夫（本紙編集人）

京都で始まる〝ニコヨン〟人生
「文殊九助」の芝居で資金集めも

――外尾さんは、元全日自労京都支部委員長や高齢者やホームレスの就労支援のソーシャルワークセンター理事長などを歴任し、現在、ソーシャルワークセンター顧問をされています。小柄な身体で、いまではひとり暮らしの身障1級の視力障害者。でも、毎日のように、白い杖をついて散歩するのが日課となっています。ところで、そもそもの生い立ちは？

極貧で学校へも行けず

1926（大正15）年2月12日昔の天長節の日に岐阜県高山市（大野郡上枝村）で私は生まれました。父は炭焼き、兄弟姉妹は10人ぐらい（!?）で、貧乏そのものでした。小学校も4年までで、炭焼き手伝いに追われ、ろくに学校に行けませんでした。

13歳の時、1938（昭和13）年ですね。大正15年12月25日に元号が改元されたけど、昭和と同い年で覚えやすい。今の東京の羽田空港の近く、蒲田区の町工場の徒弟として働きだしました。酸素ボンベのメーターなどをつくっていました。溶接工見習いです。給料はたった3円、積立て預金とか国債協力とか、寮費とか訳がわからん風に抜かれて手取りは、2円。戦時中は軍需品を扱っているということで、将校が配置されていました。戦時下の便法か、東京で徴兵検査を受け、「甲種合格」。いつ引っ張り出されてもおかしくない状況でした。

1945年3月10日の「東京大空襲」の時は、対岸の火事みたいにきれいだなあと眺めていたもんです。その報いが4月15日の空襲で下りました。夜空を照らすサーチライトに浮かび上がるB29、一発もあたらない高射砲、会社の寮が焼夷弾で火災にあわないように必死の消防活動をしました。消防活動をした人の中には、火の手から逃げるために防火用水に飛び込んで焼け死んだ遺体を火消しの鳶口で引き上げたという話も聞きました。

20歳になったばかりの頃で体力はありましたね。寮は焼けずに残りましたが、工場の方は丸焼け。それでも栃木県にある小学校の講堂をつぶして、残った旋盤やドリルを持ち込んでの、工場疎開。6月頃、2，3台旋盤が動いたけれど削るべき部品の材料なし、そんなこんなで8月15日の敗戦です。軍需工場は解散といわれても……。つまり、敗戦・即失業です。

敗戦前に長兄はラバウルで戦死、次兄は結核で病死。滋賀県の石山寺近くの東洋レーヨン工場の女工さんだった次姉から、親父が死にかかっていると連絡がありいったん帰省しました。長姉の嫁ぎ先は百姓だけど小作人で、その仕事の手伝い。結局、帰ったところで高山には居場所がなくて。

九州や山口の炭坑を転々と

――すごい〝昭和の自分史〟ですね。

敗戦即失業ですから、高山市の職安の紹介で稼ぎがすこしましな、九州の炭坑を紹介されて。「流れ者」人生です。九州や山口県の炭坑の飯場を転々として、日雇い暮らし。おやじは炭焼き、息子は石炭掘りに進化だ。九州の鯰田炭坑では落盤事故にもあったね。山口県の小野田の白岩炭坑でも、日雇い。条件がいいとかで人によっては、あこがれの山陽無煙炭坑では抗外夫、お金をためとにかく東京にもどりたかった。

戦後の傾斜生産方式とかいう石炭増産の時代だったけど、飯場仕事はいわゆる3K、危険で、汚くて、きつい。当時の炭坑時代の「全石炭労組」役員で首になった友人が、下宿屋の入り婿になっていたのでそこにころがりこんでね。その下宿屋が伏見区墨染の槿木町（遊廓が残っていた）にあって、2階を米軍将校のオンリーさん（占領軍の軍人専属のお妾さんのこと）に賃貸し、私は階段の登り口の3畳間をかり、1カ月ほど居候したね。1953（昭和28）年春頃、つまり28歳だわね。

そこも、居づらくなってね。そこから南区東九条の大石橋で入り婿になっていた別の日雇い仲間のところに転がり込み、伏見の寄せ場にかよいはじめたわけ。当時、伏見の中書島の職安には毎日、2000人くらいが仕事探しにきていた。登録がない人は朝6時頃から仕事の紹介をうけたり、失対登録をしたりしていた。

当時の仲間には「豆炭」とよばれた吉田さんという人もいたな、後に自由労組西陣分会の委員長もした人だけど。その1953（昭和28）年

8月14日の南山城水害と9月25日の台風13号による府下の大水害。井手町水害復旧工事の〝飯場〟募集を聞いて、下京区寺町にあった労働会館隣の南昌院というお寺で全日自労の存在を知ったということ。それで〝ニコヨン人生〟のはじまり、はじまり。以上終わり。

――すみません、もうちょっとお願いします。京都府労働経済研究所の「京都労働運動史年表（1945～1955）」の1950年概観などを読むと、1950（昭和25）年は民統会議（全京都民主戦線統一会議）の力で高山義三さんの京都市長選挙、蜷川虎三さんの京都知事選挙、戦前の労農党委員長の大山郁夫さんの参議院選挙などの勝利という〝明るい話〟と占領軍のトラの威をかりる狐のような「レッド・パージ」と共産党の「50年問題」にみる指導上の未熟さという〝暗い話〟のメダルの表裏が際だちます。電産（現・関西電力）など基幹産業・重要産業での左派活動家をレッド・パージして以後、「京都の労働運動の左派を形成するものは、全官公京都地協と急速に力を増して来た自由労組となった」とし、「自由労組が短時日の間に組織を伸ばし、活動力を強化したのは、失対従事者の急増によるものであるが、（昭和・引用者補注）24年の企業整備及び行政整理、さらには25年のレッド・パージで解雇された活動家が自由労組に加入し、組織、交渉など組合指導におおきな力を発揮した結果であるとみられる」と指摘しています。

全日自労が失業対策事業の改善をもとめて、円山音楽堂の決起集会や京都府・市の庁舎内座り込み闘争など〝ワイルドな戦術〟でがんばってます。日本人らしく正月を迎えられるように越年闘争として「モチ代寄こせ」、「喰わせろ」「働かせろ」とか、迫力ある闘争スローガンを掲げて。その自由労働者の組合活動家となった外尾さんと西口克己との出会いはどうなります。あの〝私の一期一会〟の方は。

「働かせろ」と組合を結成

すこし、年表風にいうと、1949（昭和24）年頃、アメリカ軍政下の「ドッジライン九原則」の緊縮財政により、町には行政整理や企業倒産で労働者の首切りが吹き荒れ、失業者があふれていた。そこに外地から復員してきた元従業員などを抱え込み余剰人員膨れの国鉄を経営合理化する名目の首切りと朝鮮戦争がらみのどさくさ紛れのレッド・パージが次々と上乗せ。失業対策に迫られた政府が「緊急失対法」を5月に施行し、政府の失業対策事業が始まってね。失業対策事業に就労する「自由労働者」が「働かせろ」「仕事あぶれを食わせろ」と組合を結成したわけ。

失業者には組合活動家やレッド・パージ組もいたし、未解放部落の人や朝鮮の人や技能労働の低い高齢の人や戦争未亡人たちも多くいたし、失業と貧乏のわけはいろいろあったわね。朝鮮戦争後の不景気の1952、53年当時は、ほんとうに大変でね。

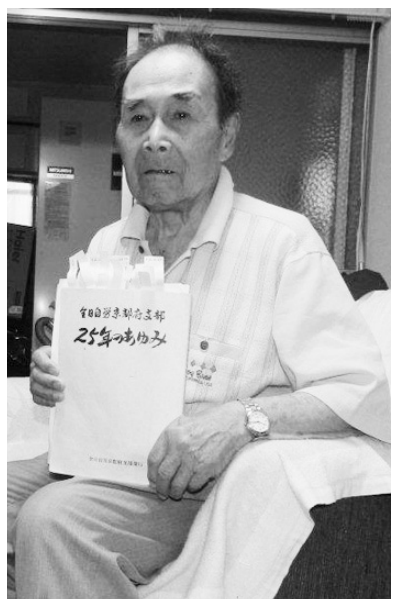
52年9月　全日自労千本分会で「暴力事件」が発生し、中心的幹部逮捕数十名。

同10月　西陣分会で暴力団による暴力のため組合分裂。

同10月　伏見分会でも市職員の暴力分子が組合幹部に襲いかかり、事務所を占拠し幹部を追い出し。

全日自労の千本分会・西陣分会・伏見分会という拠点組織にかけられたいわゆる「反共分裂主義」攻撃ということかね。組合民主主義の試練でもあったと教えられたね。

以後、伏見では互助会を結成し、組合再建運動がはじまった。その伏見でのゴタゴタ最中の1953（昭和28）年春ころ、私は友人宅に転がり込んでいて、京都に居ついたわけね。仕事を伏見の職安中書島分室でつくり、東京へ戻るためにお金をつくる、あくまで腰掛けのつもり。



全日自労府支部「25年のあゆみ」を手に語る外尾さん

さっきいったとおり、1953年8月、当時の自由労組の呼びかけに応え、井手町の水害復旧工事に加わる。この災害支援の現場は全日自労が自前の費用で組織したもので、伏見の互助会と知り合うきっかけとなったね。1954年6月、全日本自由労働組合の伏見分会再建準備会を結成し、同年6月の正式に組織活動を開始した。森谷健三委員長と国鉄レッド・パージ組の中井昇書記長のもと、初めて私も分会執行委員になった。

1958年頃の伏見分会執行体制は委員長森谷健三さん、書記長中井昇さん、婦人部長奥田春枝さん、分会執行委員山角徳一さん、島つゆ子さんらとともに、私も財政部長として活動しました。森谷さんは1959（昭和34）年度途中に京都総評の常任幹事にもなりました。

この頃、恥さらしですが、全日自労京都支部財政部長が組合のお金を使い込んで、箱根で温泉遊び、組合の財政部長が不在となって、伏見分会の財政部長をつとめながら、全日自労京都支部財政部の仕事を59年（?）末頃まで兼務だったな。昼は現場仕事で、夜は組織活動。両方の財政を見るのはムリムリ。

反失業大行進で東京まで歩く

――つまり、1959年頃が非専従から専従常任になる〝私の転機〟ということですかね。

そのとおり。1959年1月6日、九州の福岡市を出発した「戦争と失業に反対する国民大行進」の3コースのひとつが、2月7日に京都入りしました。最低賃金制確立・失業反対・社会保障充実などの労働者の制度的要求は、組織労働者と未組織労働者の結び目の役割を担う全日自労が果たさねばと決意して参加。これは、総評中央が呼びかけた「3・4戦争と失業と貧乏に反対する全国大集会」に参加するためです。京都代表団4人のうちのひとりとして東京まで〝通し行進〟しました。途中の愛知県あたりでは、100人を超える行進団になったね。半失業の生活のみじめさを体現し沿道の国民に失業反対を訴えつつ国会に向かう文字通り〝飢餓行進〟だわ。34歳だったね。

芝居の総監督は西口克己氏

東京から帰ってきた後、59年4月に「伏見の組合は金ないから、財政活動として芝居をやる。お前も参加してくれ」と森谷委員長にいわれて、出番と台詞が少ないならと引き受けたけど。割り当てられた役は年貢取り立てを厳しくやる悪奉行。組合費集めの財政部長が年貢取り立ての悪奉行、どういうこっちゃ。夜みんなで『伏見義民伝・文珠九助』の芝居の練習をした。町衆一揆のリーダーの文珠九助は、当然、委員長の森谷健三さん、女房役は婦人部長の奥田春枝さん、町年寄役は中井昇書記長、三味線は山角徳一さん、深草の米軍基地の近くにいた組合の会計監査の小谷さんが旅劇団関係者で時代劇のちょんまげのカツラを調達してきて、本格的だったね。

その総監督が1959年春の一斉地方選（伏見区）で初めて共産党の議席を得て市会議員になったばかりの西口さん。で、私が奉行所のお白州で町人をけっとばす役、西口さんがつれてきた府学連の学生さんが蹴られ役、役人に引っ張られて行くのが多分学芸大（現教育大）社会科にいた井手町の森田さんという女子学生。厳しい練習じゃなかったけど、とにかく本番より練習が面白かった。心底おもしろかったなあ。

公演の費用集めでは、伏見の酒造会社に寄付をお願いにまわり、「なんで失対のニコヨンに金を出さなあかんのや」とことわる酒屋さんもお酒の一升瓶ぐらいは寄付してくれたり、伏見で一番大手の酒造会社さんもこころよく協力してくれたりして。総じて、伏見の酒屋さんは〝お祭りには協力せなあかん〟という気風がありましたね。要するに、気分は勝手にやってる〝義民まつり〟みたいなもんで。組合費が20円ぐらいの時10円だったかな、参加協力券もお願いして。

会場は伏見公会堂（当時は旧伏見区役所3階にあった）で、大入り満員。この芝居は、59年10月11日、全日自労京都府支部結成10年周年記念の文化祭において京都府民生会館（上京区烏丸出水にあった）で再公演し、拍手喝采でした。芸達者が多かったな。

――西口さんの奥さんも自労のおばちゃん連中が、「キュウ助さん、キュウ助」というのがおもしろかったと語ってました。本当は「もんじゅくすけ」だけど、と台詞間違いをチェック。2000年京芸50周年記念公演の「文珠九助」で観客動員3ステージ3500人の記録に先立って、自労の「文珠九助」が初演だったという今としては〝秘話〟ですね。それからですね、京都では西口克己原作の小説や映画などが劇化・公演されても原作料を革命的に出さなくなる伝統は！

西口さん講師に学習会も

1960年はカンパ・署名・激励オルグ派遣などの支援をした三池炭坑首切り合理化反対闘争、戦争につながる軍事同盟なくせの安保反対闘争、翌61年に高山反動京都市長が持ち出した失対打ち切りに反対する闘争と続きました。

この59年春の一斉地方選挙で市会議員になっていた西口さんには分会の会議によく来てもらいました。「社会発展の歴史を学ぶ」と言うことで始めたと思いますが、分会委員レベルが対象で30人近く参加しました。何回か一般的な話をしながら、その中で中心的なところに対象をしぼって話をするという方法でした。学習会としては成功しなかったと思います。なにせ、仲間は私も含めて小学生以下の学力で、字も読めない人が半分程いました。それでも、西口さんの「唯物史観」を子守歌にして贅沢に居眠りをした訳です。とにかく、昼間の労働でみんなくたびれていたね。

――自労の人で竹田出橋の出口勇さんとか、桃陵市営にいた志倉良治さん、三木八重子さん、深草の吉田オワイさんなどは地域でも個性的で目立ちましたね。志倉さんと一緒だった三木八重子さんは知事選挙をはじめ選挙の街頭演説会のたびに、テープレコーダ持参で股旅姿になって踊るんですよ。東海林太郎の「勘太郎月夜」で踊っていると、なんだなんだと野次馬みたいに人が集まってきて。

とにかく有名人でした。もともとは千本分会から移ってきた元小学校の先生でレッド・パージ組。志倉さんは組合のやる構成劇の中心メンバーを引き受けてくれた。出口君は特攻帰りで背が高くけんか早くて、56、57年頃の分会執行委員で、いわば組合の無任所大臣だったね。現場から地下足袋姿でかけつけ、京都府の労働部の係長あたりをつるし上げたり。途中で自労の役をはずれ、部落解放同盟のオルグみたいなことを

していたけど、女性の多い自労では男連中はマイペース組が多くて、一時私と意見がずれたりしたのかな。

1960年春に、私は全日自労伏見分会の委員長になりました。

区画整理反対で地域総ぐるみ

――西口さんの口癖、「共通分母でくくる統一戦線運動を」というのがありましたが、どうでした？

そうですね、1963年頃に竹田街道の棒鼻から南へ道路拡幅のための区画整理問題が起きました。道路拡幅すれば開発利益が出るはずだからと土地を2～3割の減歩率で減らすといわれても、そんなことされたら店舗併用住宅や自宅の建て替えもできなくなってしまい、今日の暮らしが明日につながらない、そりゃ殺生や、ということになった。保守的な考えの旦那衆が多い地域でもあってね。

――西口さんの自治体小説「Q都物語」（都大路の章）のはなしですね。1962年に大阪府を中心とした近畿圏開発促進協議会が「近畿はひとつ」のスローガンを国の近畿圏整備構想で権威づけました。いわば、国策を京都市なりの道路整備に箇所付けしたものです。後の京都市長となる今川建設局長時代のことでした。

京都市と住民の突っ張り合いが膠着した翌年の夏。全日自労伏見分会と部落解放同盟竹田支部（当時）と伏見区画整理反対同盟が、西口さんも立ち会って共同行動の話がすすみました。中核になった三者合闘の決起集会が丹波橋の日本蚕毛染色株式会社（当時）のそばの東高瀬川の堤防の上で開かれました。

――すこし、外れた場所ですね。

京都市に楯突くやからには近くの住吉公園を貸さないというので、ならば都市排水路みたいになっていた東高瀬川の堤防敷で決起集会を計画しました。河川の管轄は京都府ということで蜷川革新府政の許可を得て。自労にすれば、いつもの草刈りの現場。三者以外にも伏見の労働組合や婦人団体や青年団体など地域総ぐるみ運動だったね。

そこから住民運動の白いのぼり旗と労働組合や民主団体などの赤旗を林立させて区画整理対象地域の竹田街道棒鼻から西大手まで南下し、大手筋商店街を西から東に抜け、京阪丹波橋に向け北上して戻る、伏見始まって以来の大デモ行進をしました。もともと自労は地域課題の取組が弱かったのですが、西口先生が労働運動と住民運動の結合のシナリオを書いてくれました。人脈も要求も共通基盤があって、共同行動は大成功。とうとう区画整理計画は撤回されました。

伏見分会の旗を手に

当時の自労伏見分会の失対事業打ち切り反対闘争と自労組合員の竹田地域の人たちの集団求職闘争、竹田街道周辺住民の区画整理反対運動、しかも部落解放同盟竹田支部の同盟員も区画整理対象地域に一部組み入れられていてね。自労の竹田地域住民の山川幸太郎さんが橋渡しして解放同盟の川部昇さんのところで区画整理反対同盟の行動隊長・藪良雄さんと私とでよく会議をしました。そういう点で、西口先生は書斎にこもりっきりの人ではなく、現場に足を運び、議会とつなぐ人でした。

――竹田の川部昇さん（現・人権連）の話では、1962年頃から、藤ノ森中学校区では市教組と部落解放同盟竹田支部（当時）が「教育と生活を守る共闘会議」を結成し教科書無償化要求運動を展開し、地域に打って出る共同闘争の根っ子が広がっていたということです。でも、根回しのオルグがいないとうまくいかないですよ。

実は廓に下宿してました

実は、売春防止法施行の1958年4月1日から、遊廓を学生下宿に変えようという〝まちづくり運動〟に関連して、学生寮企業組合になった西口さんの下宿屋に私も間借りしていました。市会議員で下宿屋の西口さんのところの1階には、日本共産党洛南地区委員会事務所が6畳一間借りていて、1960年春に府委員会のオルグとして砂川良昭さんが委員長となって詰めていました。もともと女郎部屋にしきられていた2階の一番奥が小説「廓」に出てくる元娼婦のモデル・源氏名かおるさんの部屋。で、その隣が私の四畳半でした。西口さんのところにころがりこむ前に、中書島の元女郎屋の下宿屋を借りていて、夜は組合の会議場所にもなり失対のおばちゃん連中もよく出入りするため、「おんな出入り」が一番多いと苦情もでましたね。1960年頃から、西口さんのところに世話になり、60年代末に西口さんが廃業し下宿の立ち退きになるまでいました。

――びっくり、ひゃっくり、九十九里ですね。聞いてみるもんです。（終）

その時、私は…

全自交100日ストの思い出

片寄邦夫さんと仲間が語る

――聞きとり　小田切明徳

前回の市会議員選挙の時、私は佐藤和夫さんの応援で伏見区向島の選挙事務所に週2日ほど詰めた。電話や来客の応対とかでいろいろと学ぶことがあったが、そこで知り合ったのが、片寄邦男さんであった。お仲間のドライバーは醍醐の行きつけのコーヒー・ショップで「おしゃべり会」を持っていたので、そこにお邪魔して聞き取りをして、私の文責でまとめたものである。お話を伺った方は、鈴木善直さん（86歳）をはじめとして瀬川、河合義和（84歳）らが常連でわいわいがやがやとなごやかなものであった。まず出されたのは、全自交の「100日ストライキ」のことであった。

6割のタクシーがストップ

1961年春闘で全自交京都地連（京聯、都、八光、弥栄、洛陽、銀鈴、山科、京和の8社の労働者2800人）が会社側に完全月給制・労働時間短縮を求めて3月24日以降ストに突入、市内のタクシーの6割がストップした。会社側は第2組合をつくり、この運動を切り崩しにかかった。それに対して、組合側はアルバイトをしながら粘り強く闘った。

結局，ストライキは97日間続けられ、6月28日に，初任給（最低保障給）2万500円，道交法罰則の経営者負担など一定の成果を勝ち取り終結した。その前後に警察が介入、京聯、八光労組の活動家を刑事弾圧。その罪名は「逮捕・暴力行為・建造物侵入・威力業務妨害・監禁・強要」など事実をデッチ上げたものだった。高裁判決まで10年もかかったが、最後は、いずれも無罪が確定した。

その裁判闘争は大変だったが、楽しくもあった。会社側は組合を切り崩しにかかり、それとの闘いの連続であった。まず自分たちの生活のためにアルバイトをした。楽しかったのは太秦の撮影所でのエキストラで端役出演であった。役者に交じって鬘を被っての映画づくりに出たこともあった。

谷善、河賢の宣伝カーを運転

その間に、選挙戦もあり、共産党の谷口善太郎や河田賢治の選挙に運転手として応援をしたことがあった。その後に議員となった梅田勝、藤原ひろ子さんらの演説も近くで聞いたが、河賢の演説は迫力があった。それに対して谷善の話し方は優しかった。丹波の胡麻で生活していたから、農村の実情を知っていたためかどうかわかないが、その話し方は女性的だった。私たちはこうした議員さんを演説場所に送る役割だった、と思い出を語る。

今も「100日スト」を闘った仲間たちとの交流は続いている。これらの会社側と組合のやり取りの記録は井上利夫さん（85歳）が自宅に残していた。彼の兄は府下の農民組合運動の指導者であった井上甚太郎さんである。その影響を受けた井上の姉妹、兄弟の多くは活動家となった。井上利夫さんもその闘争中に捕まって山科署の留置場にぶち込まれる弾圧をうけた。八光タクシーの女社長の攻撃は、懐柔策も含めて、組合の分断をはじめ、ありとあらゆることをやってきた。赤を見せしめにしようと組合員の子供まで巻き込んだ、激しい攻撃がなされた。

どっこい、頑張っている

片寄さんらはこうした闘いで結ばれた強い絆の仲間とともに元気である。

京都一円を運転しながら、北の産業廃棄物の不法投棄の現実や南の洪水で荒らされた道路をしっかり見つめるタクシードライバーの話から、私は五百年前に南山城を中心にして戦われた「山城国一揆」を思い出した。馬借と呼ばれた交通従事者がこの一揆では指導的な役割を果たしたが、このタクシードライバーの能動性、楽天性にそんな伝統を受け継いだのではないかと思わず感じ入った。

（写真は全自交の100日スト）

研究ノート ②

京大看護学校事件と天皇巡幸

今西　一（小樽商科大学教授）

前回の朝鮮戦争前後の京都の学生運動の研究状況の紹介で言っていた、新しい資料の発掘を続けているという話を書いたら、その資料のいくつかを、紹介しろと編集者から言われた。そこで戦後の学生運動の歴史をふり返りながら、二、三回の資料紹介を書くことにする。

一　GHQの見た京大看護学校事件

戦後の京都の学生運動のなかでの最初の大事件は、一九四九年五月一四日の京大の看護学校事件である。この日、厚生女学部（いわゆる「看護学校」）の学生六名が、京大医学部病院に採用されず、学生と病院が対立して、戦後初めて京大に警官隊が導入され、三名の学生が逮捕された事件である（『学園新聞』）。

この事件については京都大学の『百年史』にも書かれており、資料の一部も紹介されているが、次のGHQ文書は、あまり知られていない。「昭和二十四年五月二十日」付けの京都連絡調整事務局の「執務年月報　第三十号」によると、「京大事件に関する件」として次のように書かれている。

京大病院厚生女学部卒業生六名の看護婦不採用にからむ紛争は、五月中旬、不採用看護婦のハンストを最高潮として、その後学生代表及び病院側との間に四名採用、その他妥協点を決定し、解決したかにみえたが、五月十八日覚書の調印を病院側が拒否し、一方京都市警察では永田局長以下警官三百名が大学構内に出動して、学生代表三名を面会強要容疑で逮捕したため、事件は採用問題より転じて学園の自治と云う根本問題にまで大きく発展した。

このことによって、「一部進歩的教授、助教授」は、「大学自治の改革に邁進する声明書を発表した」。学生のなかでも「左右の対立が激しくなりつつある」と指摘しているが、GHQは、「本件学生側の動きは、東京にある共産学生同盟によって指導されている情報もあるので、京都軍政部では本件を重視して大学総長、市警局長、検事など関係者を招致」して状況を聴取している、と書いている。この報告は、今では『日本占領・外交関係資料集　第二期』の第七巻に収録されているので、簡単に見ることができる。

私が、京大の「看護学校事件」の話を初めて聞いたのは、それこそ一九六九年の大学闘争の頃で、当時京大の憲法学の教授であった川口是氏に、大学の自主講座で「七〇年安保」の話などをしてもらっていた時、余談で「看護学校事件」の話になり、「自分はまだ学生で、共産党にも入っていなかったが、この闘争で看護学校の学生組織は、壊滅的な打撃を受けた。その時の罪の意識から、組合の仕事などを持ってこられても、断れないのだ」という話をされていた。その後も、京大を辞めて知事選に立候補して、早世された。今となっては詳しい話が聞けなかったのが残念である。

二　昭和天皇の巡幸

一九五〇年には、レット・パージ反対闘争があるが、これについては京大の補導部員で処分する側にいた吉川幸次郎氏の回想（『中国の知恵』）や高橋和巳の一連の小説があるが、豊田善次氏の『高橋和巳の回想』（構想社）が一番詳しい。

ここでは、翌五一年の京大天皇事件の前提となった、昭和天皇の近畿地方への巡幸について書いておきたい。この巡幸は、まさに昭和天皇による、敗戦後の天皇制の存続をかけた一大イベントであった。最近でも多くの書物や写真集がだされているが、これが平和裏に進められたように書くのは、まさに歴史の偽造である。「宮内庁　行幸啓　昭和二十六年　総理府公文　巻十四」という資料が、国立公文書館にある。そこには、次のような一一月一七日に配布された、三重県共産党のビラの写しがある。

巡幸をめぐってのアジビラ散布について

天皇陛下の三重県巡幸に対して本十七日早朝、日共中勢委員会では別添写のような内容を、謄写版刷（半紙四ツ切）したアジビラを津市内の主要路上で、通行人に多数配布した。なお、県下その他の地域では未だ発見されていない。

天皇をこんなにまでして

十何年前ぶりかで天皇が来県するというので、半年も前から「天皇奉迎準備」がすすめられている。国民の象徴である天皇が、復興途上の日本の姿、国民の生活を御視察になるというと聞えもよいが、大さわぎを一寸横から冷静に考えてみるとどうだろう？

市町村や県では、莫大な予算を使って、知事官舎に太いガス管を引いて、ガス風呂を作ったり、アメリカ製の自動車を買いこんだり、表通りだけは舗装や清掃に大さわぎで、役所や警察は日常の仕事もソッチのけになっている。しかもこの金は差押え公売までしてとりあげた税金だ。津市では百万円の予算だそうだが、実際には二百万円以上使われるだろう。

私たちは血と汗の税金がやたらと使われているのでは、「街がきれいになるからよい」等とのんきなこともいっておられない。本当の国民の生活みたいのなら水戸黄門のようにおしのびでやってくるのがよい。そこには配給の米もとれずに、寒さに向って窓ガラスも破れ放しの教室がある。反面料理やへ入りびたりの官僚や戦争景気でボロもうけのものがいる。こんな目かくしの視察に名をかる行幸が大さわぎをやっているスキに国会では講和

永原誠氏（立命館大学名誉教授）の思い出

岩井忠熊（本会代表）

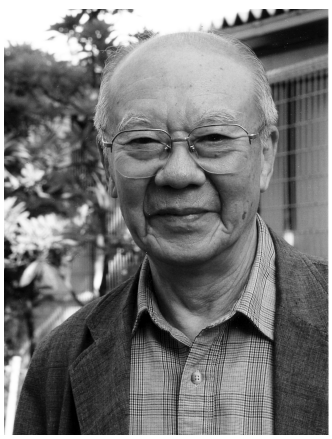
悼

淡々と語った被爆の体験

5月23日、永原誠氏（立命館大学名誉教授）が亡くなられた。85歳。肝臓ガンだったという。会うたびに入退院を繰り返していると告げられたが、私にはその病に広島での被爆が少なからず影響したのではなかったかと思えてならない。

永原氏は原爆で父・母・妹の3人を亡くすという悲運にあわれ、みずからも被爆された。そういう体験をみずから語る時に、いつも手短に淡々として、けっして激しない人だった。彼が懸命に取り組んだのは被爆者懇談会であり、被爆者援護だった。勿論それは原水爆禁止運動の一環にちがいないが、スローガンよりも被爆者の生活そのものをまもるという点がきわだっていた。

永原氏は占領下日本での第一回の公募によるガリオア資金の米国留学生（フルブライト資金留学の前身）だった。その専門としたアメリカ文学研究については私の語りうるところでないので他にゆずろう。筆者は1949年に立命大文学部に就職したが、私を除く全教員がいわゆる戦前派なので、私はひとりちぢこまらざるをえなかった。そこに永原氏が新設の英米文学専攻教員として着任され、ほぼ同世代の私はようやく仲間ができてホッとしたものである。



思えば親交は60年に及んだ。いつもニコニコし、あたりが柔らかだったが、立命館教職組委員長を2回、書記長を1回など、とかく敬遠されがちな激職もいとわず引き受けた。だから学園情勢についてもいつも定見をもち、時に私に対する批判・反論も辞さなかった。すこしばかり年長の私も彼の正論に服したことがしばしばあった。

永原氏と私と似たところがある。両人ともスポーツが苦手なことだ．組合の企画で野球などにかり出され、互いに不器用を嘆じた。だがやはり組合の行事で浜寺に行った時、永原氏も特に上手ではないがよく泳いだのを見て、私も安心した。水泳だけは私が人並みについていけるほとんど唯一のスポーツだったから。変なところで似ていることが、一つの親しみとなっていたようだ。

思い出は一杯あって書ききれない。永原氏去って時に寂寞の感にたえないことがある。

安全保障の両条約がウヤムヤのうちに自由党の手で可決されようとしている。結局「天皇行幸」は、国民に一文の利益を与えるどころか、損害をかけ毎日の生活苦をゴマかすための人形行列で、東条らが利用した天皇制復活に外ならない。

1、税金は国民の利益のために使え！
2、天皇制廃止、大統領制の樹立！
3，おかざりの天皇をかつぎまわるな！
4，日本の独立と平和をおかす講和条約反対！

日本共産党中勢地区委員会

京大天皇事件の直後に撒かれたビラである。内容は、民衆の生活が困窮しているなかで、天皇の行幸に、なぜ大金が使われるのか、という批判が書かれている。しかし、この行幸が日米の講和・安保両条約の隠蔽のために使われていることは、明確に指摘されている。しかも、「天皇制廃止、大統領制の樹立」という要求も書かれている。

共産党の非合法機関紙『平和と独立』では、「天皇、血税のなかを歩く―三重椎茸協組、献上品を拒る」（七三号、一九五二年一一月二〇日）と書かれている。当時の三重県は、労働、農民、部落解放運動の先進地域であり、同紙でも、「六百の警官包囲下に　籠城一昼夜　斗いぬいた自由労働者　三重松坂」という、有名な松阪市の「職安占拠事件」の記事が掲載されている。これら『平和と独立』などの記事から、天皇制打倒の問題が当時の共産党の主要な闘争課題であったことがわかる。

BOOK

『新日本婦人の会 京都 50年の歩み』

編集委員会に参加させていただいて

新日本婦人の会京都府本部事務局次長　澤田季江

昨年11月23日、新婦人京都府本部は創立50周年を迎えました。この記念に、府本部の50年史をまとめることとなり、第1回の編集会議からまる4年かかりましたが、ようやく刊行することができました。

府本部でお仕事をさせていただいてまだ10年にも満たない私にも、編集委員に入っておきなさいとの先輩方のお声がかかり、末席に連なることとなりました。結果として編集委員の年齢構成をみると、80代、70代、60代、50代、40代と50年分そろっており、これだけをみても新婦人という組織の幅の広さをあらためて感じます。

若い世代に魅力伝わるように

編集にあたっては、親子リズム小組の会員など、とりわけ若い世代に新婦人の魅力がまるごと伝わるようなものにしたいね、新婦人の50年のあゆみは、いま自分たちが抱えている日々の生活や願いにつうじているんだなあと共感してもらえるようなものにしたいね、と話しあいを重ね、編集委員会としてそこにもっとも腐心してきました。

そして、創立当時のことを知る会員さんはもちろん、各年代の、そして各地域の新婦人の姿を知る会員さんや民主団体の方々、さらには行政や新聞社などの会内外のみなさま…とざっと数えても100人をこえる方々に、直接お会いして、あるいは電話や手紙での取材をさせていただきました。

創立前の会費の金額を決める過程での侃侃諤諤の議論、創立直後の冬、気象観測史上に残る〝3・8豪雪〟が府北部を襲う中での支援活動、西陣織に従事する家庭の子どもも保育所に入りたいという運動、交通事故から子どもを守る交渉で蜷川知事があらかじめ危険な個所にピンをさし、びっしりと今後の対策が書き込まれた大地図を広げられたこと、ベトナム支援や沖縄返還の運動、国労分割民営化とたたかう家族を支える活動、久美浜に原発をつくらせない30年にわたるたたかい、金融や自治体の職場班で仲間のよりどころとなってきた班、福島から避難してきた母子やボランティアに取り組む会員さんの思い…などなど、当時の京都の大きな時代的な空気と先輩女性たちの前向きな生き方、そして新婦人への〝愛〟がイキイキと伝わるものとなりました。

さらに、府本部結成の呼びかけ人のお一人・城ゆきさんは戦前、治安維持法に抗してたたかった女性として知られていますが、初代府本部会長の中井あいさんもまた、戦前、治安維持法で傷ついた少女の治療と回復を支えていたという事実を知り、年史にも京都府本部の誇りとしてこれらのエピソードを反映することができたことは大きな喜びとなりました。

はんなり、しなやかな運動に涙

こうした取材の内容をまとめながら、あらためて京都の新婦人の、はんなりと、しなやかで、あたたかい数々の運動の物語にふれて、深く心を揺さぶられ、パソコンを打つ手をとめて涙をぬぐうことがしばしばありました。本当にたくさんの方々のご協力の上にこの年史を完成させることができましたことと、このような学ぶ機会をあたえていただきましたことにまずは心からの感謝を申し上げたいと思います。

年史には府内のすべての支部が登場していますが、まだまだ書きつくせなかったエピソードが埋もれているはずで、そこのところはぜひ今後、それぞれの支部や班で「わが支部・わが班の50年史」を掘り起こし、この50年史とあわせて若い世代に語り継いでいただけたらと思います。

最後になりますが、50年史の発行を待たずに、3人の編集委員を相次いで亡くしたことは本当に悲しいことでした。50年史の刊行を一番はじめによびかけられた岩井圭子さん、多忙な会長職を務めながら府本部の年表をコツコツまとめておられた末松弘子さん、介護アンケートの資料をまとめてくださった川上系子さんの3人です。ご自身にとって最後となった編集委員会で、岩井さんが「新婦人をつくって本当によかった」と力をこめて話されたそのお顔を私は忘れないでしょう。3人に年史の完成の報告と心からありがとうの言葉を伝えたいです。

この『新日本婦人の会　京都　50年のあゆみ』がより多くの方に読まれ、京都の新婦人が次の新たな50年にむかって、〝ゆるゆる・ふっくら・根づよく〟歩んでいくその道しるべとなることを心から願ってやみません。

同書はA5判160頁・頒価1000円。☎075（342）1552

『京都民報』私史 6

湯浅俊彦

紙面・性格めぐっての論争

京都民報の編集で私が一番大事にしていたのは、購読料に見合う紙面の魅力であった。数ある新聞の中で、読んで値打ちのある記事、読みたい連載や、運動に役立つキャンペーン企画などをたて毎号努力してきた。一般紙や赤旗との併読者がほとんどだから、他紙が扱わない記事、同じ報道記事でも週刊紙らしさ、民報らしさが出るよう工夫していた。

しかし、これがなかなか難しい。とくに共産党の府常任委員会から様々な注文・意見が「指導」として出されてくる。それをどう受け止め紙面に反映させるかが一番の悩みだった。もちろん、民報の発展を考えての指導であったと思うが、「党勢拡大運動の記事を必ず1面に入れよ」などの指摘には正直困った。読者が民報の紙面に望んでいるのはそんな記事ではないことは明らかだった。

党の指導と記者からの突き上げ

編集会議でいつも記者から突き上げられるのは私だった。中間管理職のような立場にあって、記者たちの意見が「正論」であると思いつつ、スポンサー的な党の指導には従わざるをえなかった。煮え切らぬ態度に若い社員たちが批判するのは当然であったが、いずれ一歩ずつ変えていこうと宥めていた。

ある時期、党府委員会事務所の二階通路に民報を掲示し、自由に意見を書いてもらうことにした。国会議員地元秘書だったMさんが「1面に党勢拡大の記事はふさわしくない」と書き込んだ。これを見た府委員長は怒り、Mさんに自己批判書の提出を命じ、以後書き込み掲示板は撤去された。委員長はこの掲示板の存在を知らなかったというが、当時の雰囲気を示すエピソードである。

もちろん、民報は共産党組織によって配達・集金してもらい、赤旗とともに機関紙拡大3目標の一つに入れてもらっていた。だからこそ各支部・党員が意識的に取り組み部数が増えたことは否めない。6頁建てになってから3面の肩に「共産党の活動」欄を設け、8頁建てになってからは「われら分局長」「こちら生活相談所」「われら共産党員」など党員像にスポットをあてた連載が82年頃まで続いていた。

しかし民報紙面の大衆化が進むにつれ読者（党員も含め）のニーズが冒頭に記したようなものであることが合意されていったと思う。とくに文化人の民報への期待や、地元メディアからの評価の高まりがあってのことだった。

「京都民報とは何か」、果てしなく続いた論議はこうして徐々に終止符をうっていった。

逆流に抗して「謀略」を暴く

74年知事選は、わずか4500票差で蜷川七選勝利となった。相手は前社会党府本部委員長の大橋和孝参院議員だった。民主府政をつぶすため数々の謀略・買収がすすんでいた。同年12月になって、公明党竹入委員長が大橋から2000万円入りの菓子箱を一時受け取っていたことが判明した。この資金は〝京滋の黒幕〟と呼ばれた上田建設から出ていたことが明るみになり、同建設の土地転がしが市議会調査特別委員会で追及され民報は独自取材で大きく報じた。

また部落解放同盟朝田派による暴力支配も拡大、革新分断に最大限利用された。

しかし一方で、解同の暴力支配に反対する世論が高まり、75年1月、亀岡市で小島幸夫共産党員市長が誕生。4月の一斉地方選挙でも共産党は府会13人、京都市会20人を当選させ、府下の全市町村に150議席をもつ第一党となった。そして、次の総選挙では，1区に続き2区でも複数を立てる方針を決定し、京都民報は11月から「山城版」を新設、3版制を実施するとともに第一週を8頁建てとした。

この頃、京都を舞台に共産党つぶしの大謀略事件が起こる。76年1月、春日民社党委員長らが衆院で治安維持法下の「リンチ殺人事件」を質問、反共キャンペーンを自民・公明とともに繰り広げた。この質問資料は京都地裁の鬼頭判事補が不法に入手したもので、京都の右翼・松本明重（元特務）、飯守重任・京都産業大教授ら〝京都人脈〟が深く関っていることを民報は暴露した。

京都2区の候補者・灘井五郎府議の南山城ゴルフ場建設にからむ腐敗が明るみに出て、3月に除名された。折から国政ではロッキード疑獄事件追及の真最中とあって「赤いピーナツ事件」と揶揄され、府政も含めて大きな打撃を受けた。この事件、灘井氏が金基浩という業者に嵌められたと見た方がいい。民報で総力取材した結果、「背後に児玉誉士夫のカ

ゲ」「著名人の名かたり会員勧誘」など金が前科八犯の強者であることなどを次々暴露した。

タブーに挑戦、スクープも

徹底取材によるスクープと連載企画が紙面の多くを占めた。毎週木曜日の朝、共産党府委員会ビルの入口に置かれた民報を買いにくる客は、黒幕と呼ばれた人物の事務所員やマスコミ関係者だった。民報の報道で知ってすぐ取材し、特ダネにした新聞もあったが、日曜日に届く民報に記者は悔しい思いをした。

どうして民報にスクープ情報が入るのか。いくつもの理由があるが、職場や地域の共産党組織からのもの、フリーライターや新聞記者からのもの、読者からの投書・告発などが多かった。無駄足を踏むこともあったが貴重な情報が多かった。

タブーにたいする果敢な挑戦も忘れられない。「解同」、創価学会、皇室、統一協会などマスコミが触れられないことを暴露した。正に民報でしか読めない情報であった。

選挙戦では知事・市長候補はもとより、自民・民社・公明の衆・参院候補者の「黒い実績」を調べ暴露した。何回か「名誉毀損」で訴えられたが、逆に誣告罪でこちらから訴えた。結局民報は私の20年間の在任中、一度も起訴されることはなかった。

民報は文化欄の魅力とともに社会面でも話題の記事を連発し、読者拡大に大いに役立った。

70年～76年の連載企画

70年以降の記者が取材・執筆した主な連載を以下に紹介する。

「府下の公害を追う」（70年12月から10回）
「公害許すまじ―たたかう府下の住民」（71年2月から10回）
「京都の自衛隊―その実態をさぐる」（71年10月から8回）
「学園の暴力支配―その実態を暴く」（73年11月から7回）
「暮らしを守って―蜷川民主府政の24年」（74年1月から10回）
「暴力と脅迫の朝田一派―京都にみるその軌跡」（74年10月から4回）
「なお続く暴力支配―同志社大学にみる」（75年4月から11回）
「市電―私はこう考える」（75年9月から8回）
「鳴り響け自由の鐘―京大にみる暴力の実態」（75年11月から13回）
「公明党―京都にみるその軌跡」（75年12月から8回）
「特定政党支持の裏側―全電通京都にみる暴力の実態」（76年2月から8回）
「原発問題を考える」（76年6月から30回）
「非行とたたかう」（76年11月から9回）

連載後冊子になって販売されたものも多いが残念ながらほとんど残ってない。

□

あわせて文化面の連載も掲げて置く。多くの連載が京都、滋賀、東京の出版社から刊行された。

71年
「新丹後風土記」八木康敬執筆（2月から17回）
「写真と文による『私の京都』」（2月から20回）
「京都市電物語　走れ、チンチン電車」吉松昭史執筆（6月から15回）
「文学碑めぐり」奥田雀草執筆（9月から15回）
「蜂の巣の子どもたち　学童疎開、ある教師の手記」（11月から8回）
「京都文学散歩」（1月から20回）・「続・京都文学散歩」（72年9月から20回）

72年
「京都の古墳」（5月から18回）
「ものがたり京都の映画」北川鉄夫（5月から11回）
「天明ののろし」吉橋通夫（8月から21回）

73年
「京都の民話探訪」（1月から30回）
「春を待つ動物園」小島一介（1月から12回）
「びわ湖」西口克己（8月から40回）

74年
「新・私の京都」西山治朗写真・奥田雀草（5月から21回）
「近代京都の足跡　進歩と民主主義の伝統」（5月から50回）

75年
「京都五億年の旅」（5月から31回）
「京都の民具」（5月から28回）
「東海自然歩道を歩く」（10月から10回）

76年
「はばたけこの子ら　京都の障害児教育」田中昌人（1月から8回）
「京の石仏」佐野精一執筆（5月から31回）
「史跡でつづる京都の歴史」（6月から25回）
「京の老舗」松村茂・文、西山治朗・写真（12月から30回）

1区で複数候補を立て全国から注目された72年12月の総選挙。NHKは選挙戦に威力を発揮している京都民報が印刷されている現場を取材、12月6日の朝のニュースで放送した。11月29日夕刻、関西共同印刷所で録画。

2013年度総会ひらく

聞き取り、掘り起こしを「燎原」に

京都の民主運動史を語る会の2013年度総会が6月15日午後、京都市職員会館かもがわで開かれました。

総会では岩井忠熊代表が「本会は大変やりがいがある組織。ますます重要になっているので大きく発展させよう」とあいさつ、井手事務局長が会務を報告するとともに、今年度の方針として、「引き続き会員の拡大をはかり、世話人体制を強化する」「聞き取りや歴史の掘り起こしを行い、会誌や例会に反映させる」などを提案、会計報告とともに可決・承認されました。

選ばれた世話人は次の通り（いずれも再選）。

代表・岩井忠熊、事務局長・井手幸喜、世話人・湯浅俊彦（編集担当）、小田切明徳（例会担当）、沼本耕典（会計担当）、家野貞夫、川合葉子、黒住嘉輝、佐藤和夫、田北亮介、馬原郁

会計監査・蓮佛亨、編集協力・須田稔

なお総会に先立って記録映画「日本の憲法」（1965年制作）の上映と、井ケ田良治・同志社大名誉教授が記念講演を行いました。（2～3面に掲載）

会員消息

総会の出欠返信に書いていただいた近況の一部を紹介します。（見出しは編集部）

馬町爆撃の碑、1月に除幕

東山区・酒谷義郎

「馬町爆撃を語り継ぐ会」では、来年1月16日、旧修道小学校敷地内で「爆撃を記録する石碑」の除幕式が出来るよう、取り組みが進んでおります。「現憲法」もあの反省を基につくられたもの：その訴えをしながら多くの人にご協力いただき完成させ、毎年、非戦の気持ちを確認する日にしたいと思っています。ご協力をお願いすることになると思いますが、よろしくお願い申し上げます。

京都の部落解放運動は今

伏見区・北原道彦

一貫して京都の民主運動史を語ってきた貴会に心から敬意を表します。日本の民主運動を深く、燎原の火のように拡がり、推進する力となることを念じています。残念ながら入院生活が長引き参加できません。皆様によろしくお伝え下さい。輝かしい歴史を持つ京都の部落解放運動は今どうなっているのでしょう。橋下にその輝かしい歴史を汚されたままではないことを念じています。

井ケ田先生（写真＝矢吹正夫氏提供）

目に余る安倍・橋下発言

舞鶴市・一会員

6月15日は舞鶴にて「沖縄・安保問題」についての学習会を予定しておりますので残念ながら総会には参加できません。それにしても安倍・橋下の昨今の発言は目に余るものがあり、貴会の運動発展を心から期待しています。

運動史をより豊かに

上京区・佐々木真成

当日は傘下単組の「組合結成60周年記念のつどい」と重なり、欠席いたします。それぞれの方が自分史を語り、京都の運動史をより豊かなものにしていける、その場所があることは大変有意義なことだと思います。

立命大文学部で教わった

左京区・廣庭基介

私は岩井忠熊先生、林屋辰三郎先生、門脇禎二先生、前田一良先生に教わりました。佐々木高明さんは1948～49年頃、京大文学部図書室哲学科閲覧室で雇員として働きながら、立命館大学二部文学部地理学へ通学し、谷岡先生に師事され、後に京大の大学院に入って、藤岡先生に師事されました。林屋・奈良本、梅原猛、佐々木高明の各先生方が立命を辞められた頃は腹が立ちましたが、残念でした。

市民の中に政治的能力を

左京区・井口和起

当日、東アジア近代史学会の大会・総会で東京に出張予定ですので、総会には出席できません。井ケ田先生のお話を拝聴できないのが残念です。

〝改憲勢力〟が国会の必要以上の多数派を形成できないように工夫し、運動することも大変大切なことです。しかし、私たち市民の中に、しっかりとした政治的能力を築きあげていくことが、今後最も大切なことだと思っています。根気のいる長期的な仕事ですが…

50年頃、鴨沂高校で活動

宇治市・宮城日出年

誠に残念ですが、治維同盟の理事会

と重なり出席できません。1950年頃、鴨沂高校に在り、ストックホルムアピールや原爆反対、更には、講和・安保・朝鮮戦争・自衛隊（警察予備隊）、破防法などの取り組みを高校生とて頑張りました。先号の関谷先生などもまた、西辻、松本彦也、細川などの諸先生にも世話になりました。その頃のことを広い立場から見直したく、ぜひ総会や例会にと思いながら…。次の例会にはぜひ必ずと思っていますので、その節はよろしく。皆様の、特に事務局の皆様の日々のお世話に感謝と敬意を思いつつ…。

夫の17回忌

宇治市・**奥田宣子**

夫修三の17回忌を無事に終えました。『療原』が継続発展しておりますこと嬉しく存じます。知り合いの先生方に入会されるよう働きかけています。

楽しく拝読

右京区・**永戸辰夫**

『療原』知らないことも多く、いつも楽しく拝読しております。総会のご盛会と会のますますのご発展を祈念しております。

東山区・**奥村三代子**

いつも『療原』ありがとうございます。何一つも出来ないままではございますが、やっぱり京都の歴史『療原』は頑張って読ませて頂いています。

宇治市・**大槻幹郎**

世界認識、歴史認識を欠き、時代錯誤も甚だしく、経済効果のみを強調して、経済格差を助長する政権の横暴を阻止することが、今日一層肝要と考えます。

筋を通して幅広く

上京区・**山本正行**

「憲法9条は世界の宝」憲法会議をはじめ、いろんな方面に首を突っ込んでいます。『療原』は先年、親友でもあり、尊敬していた故佐藤良輔（元京教組委員長）追悼文を書いたのがきっかけで入会しました。いろんな考えの方の名が出てくるのが楽しみです。個人としては、旭丘中学校の教育、事件の今日的な総括を、共にやりたいのが一生の仕事です。いろんな方と付き合いたい、「筋を通して幅広く」（恩師の言葉）、できることからやりたい。

総会の会場で岩井代表と

毎号楽しみに

高槻市・**小竹義夫**

京都の民主運動史は他人事と思っていましたが、現役を退き10年と経つうちに、一緒に運動に参加してこられた方々が、次々と歴史上の人物になっていかれるにつれ、他人事でなくなってきています。〝あの時、その時〟を振り返りつつ毎号を楽しみにしています。

同時代を共有

伏見区・**今西　一**

久しぶりに井ヶ田先生の話を聞けるのを楽しみにしています。『療原』確かに受け取りました。大原進さんは、高校時代に生徒会連絡協議会などの運動で知り合い、同世代ですので同じ時代を共有しました。ショックを受けましたが、心から追悼の意を表します。

編集後記に同感

宇治市・**須田　稔**

「まだまだやっておきたいこと、書き残しておきたいことが多く、少々焦ってきている」と湯浅編集長。同感の小生。あれこれの集会や講演会で刺激を受けねばという想いと、思索のあとをまとめておきたいという想いとは、なかなか両立しにくいのですね。

入会

山本晴彦（山口市）・田中隆夫（西宮市）

退会

臼井照代（左京区）

どの年寄りも伸びる！

「名もなく貧しく心美しい年寄りたちの語らいの会」　10年の活動に幕

まる10年間、皆さんと共に続けてきた「名もなく貧しく心美しい年寄りたちの語らいの会」は、十年一日のごとくの言葉どおり、長い年月、少しも変わることなく歩み続けることができました。

しかしながら歳には勝てません。10年の月日がたったということは，10歳歳をとったということです。今、私は、この10年を振り返り、「よい人生を歩かせていただいたなあ」と思います。「会」の事務局員として、「世の為に役立つ仕事、活動、実践ができたとき、個性は輝く」の鰺坂真先生のお言葉が身に染みました。

同時に私は、大きな宝物を頂戴しました。それは教員時代の「どの子も伸びる、出来ない子はいない」が、いま「どの年寄りも伸びる、できない年寄りはいない」に発展したことです。

日本国憲法とりわけ第9条を守るため訴え続けて生き抜いてまいりたいと心から念願いたします。みなさん、ご一緒に頑張りましょう。長い間、本当にお世話になりありがとうございました。遅くなりましたが終了のごあいさつと致します。

2013年　憲法記念日に

藤原ひろ子

（長文の手紙を要約し見出しを付けました。編集部）

情報スクラップ

岩崎革也の旧邸初公開

京丹波町、200人が来場

京丹波町須知にある岩崎革也（京都最初の社会主義者。1869～1943）の旧邸が5月12日、初めて一般公開された。京都縦貫自動車道の延伸工事に伴い年度内に取り壊されるとあって最初で最後の公開。全国から200人もの研究者らが訪れた。

この旧邸は1882年（明治15）年に完成。1800平方メートルの敷地に、3層構造の建物と茶室や庭園がある。居間には、交友のあった犬養毅や田中正造の扁額が飾られ、歴史的に貴重な史料も数多く残されている。

これに先立ち開かれた集いでは、幸徳秋水の縁者や、堺利彦・犬養毅の研究者も出席、元須知高校教諭の芦田丈司氏が講演し、革也と社会主義との深い関係にふれ、新たに分かった史実を紹介した。（「燎原」次号に地元研究者の一文を掲載する予定）

写真は公開された岩崎革也旧邸

民主運動史を語る会 9月例会

とき 9月20日（金）午後2時～4時半

ところ 東山いきいき市民活動センター会議室

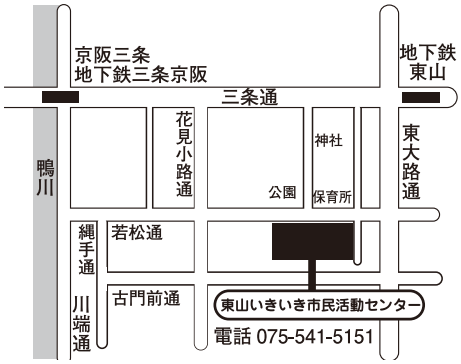
花見小路通古門前上がる東入る南側

テーマ 戦後京大学生運動史研究で明らかになってきたこと

語る人 山本正志さん（京大学生運動史研究会）

1971年、京大理学部宇宙物理学科卒。在学中、京大同学会委員長など学生運動。卒業とともに日本共産党専従、2007年4月まで京都市会議員（5期20年）。現在、河上肇記念会世話人、高等教育研究会事務局長なども務める。左京区在住。

例会は隔月に開きます。どなたでも参加できます。会員は無料。会員外の方は資料代300円。



京都で日中韓青少年キャンプ

第12回日中韓青少年歴史体験キャンプが8月7日から12日まで京都で開かれる。「子どもと教科書ネット21」、立命館大学コリア研究センターなどでつくる実行委員会が主催。大江山ニッケル鉱山、浮島丸殉難者慰霊碑、耳塚などのフィールドワークや井口和起・東アジア近代史学会会長の講演「京都の平和民主運動の歴史から学ぶ」等が予定されている。

宿泊先は宇多野ユースホステル。参加費は中・高生35000円、スタッフ45000円。問い合わせ＝☎03・3265・7606

催し案内

京都ピースナインコンサート 7月20日（土）午後1時30分開演、京都教育文化センター・ホール。横井久美子・松元ヒロ・高石ともや・笠木透と雑花塾。前売り3000円（当日3500円）。同実行委員会・京都蓮根の会主催。

参議院選挙をメディアはどう伝えたか 選挙報道の総括と選挙後の政治の動向を占う 7月30日（火）午後6時15分～8時45分、ウイングス京都。日比野敏陽・新聞労連委員長と政井孝道・元朝日新聞論説主幹が講演。京都ジャーナリスト9条の会主催。参加費1000円。

第33回平和のための京都の戦争展 8月6日（火）～11日（日）午前9時30分から午後4時30分まで。立命館大学国際平和ミュージアム。「原発と原爆―人類と共存できない」「平和憲法の真価」「日本軍と慰安所」など展示。同実行委員会主催。

編集後記

▼いよいよ参議院選挙が始まりました。都議選での共産党躍進の勢いを再び示したいもの。日本の未来がかかったこの選挙、ぜったい負けてはならじと老体に鞭打ってがんばっています。

▼かもがわ出版を昨秋退職して困っているのは会社に置いていた私物の本・資料類の扱い。「燎原」の編集や執筆にも欠かせないので自宅に持ち帰りつつあるが、今度は自宅の書斎が満杯。「ゴミ箱みたい」と女房に言われながらも砦を死守しています。湯浅晃さんが遺著『20世紀・私がたどった道』の中で「京都に民主運動資料館（仮称）の建設を」と提言されています。「活動家の貴重なメモなどが引き継ぐ人がいないためゴミとしてなくなっている」ことを憂い、民主団体で建設準備委員会をつくって活動を始めるべきと書かれている。本会が音頭をとって呼びかけては…と思うのですが。

▼1面に新連載「史跡散歩」。本会の行事として史跡散歩を企画してほしいという要望を聞き、とりあえずは「点」を連載し、いずれその点をたどるコースをつくり、実際に歩くことにしようという思いつきから始めました。隠れた史跡などがあればぜひ紹介してください。同時に好評だった「この1枚」も引き続き随時掲載しますので写真の提供をお願いします。（湯浅俊彦）